

# 『教員必携 外国につながる子どもの教育3』刊行報告



宇都宮大学国際学部特任准教授

若林 秀樹

学校現場で外国につながる子どもの支援に当たる方々に向けた入門手引き書『教員必携 外国につながる子どもの教育』の第3刊が出来上がりました。今回は3部構成となるその内容を紹介します。

第1部は、「みんなで考える時がやってきた」と題し、教員の皆さんへのメッセージを収録しました。今年1月に文部科学省から発表された「平成26年度より学校における日本語指導を正規教育課程に位置づける」という報道により、外国につながる子どもの教育は大きな転換期を迎えようとしています。これは「日本語指導が必要な子どもが一人でもいる場合は、正規の教育として日本語指導をおこなわなければならない」ことを表しており、これまで「外国人集住地域」や「多く在籍する学校」において、「特別な教員たち」によっておこなわれていた支援が、一人でも在籍する学校でも実施されなければならないことを意味しています。

「みんなで考え、みんなで取り組む」ためには、外国につながる子どもの教育の「これまで」と「これから」を全ての教員のみなさんに振り返っていただく必要があると考えました。全体を8章に分け、第1章から第6章はこれまで約20年間の学校現場での取り組みや課題についてまとめました。この分野の「これまで」を約1時間で復習できる内容になっています。そして、第7章と第8章には、支援に必要な教員の資質とは何か、そして外国につながる子どもの教育が日本人児童生徒を含む教育全体にとっていかに大切か、確固たるメッセージを収録しました。

第2部は、「栃木県における外国人生徒の進路状況2」と題し、HANDSプロジェクトがこれまで2回実施している外国人生徒の進路状況調査の結果についての報告を収録しました。これは平成23年3月と平成24年3月に栃木県内の

公立中学校を卒業した外国籍生徒、及び3学年時に「日本語指導が必要」とされていた生徒の進路について調査したものです。県内すべての公立中学

校に調査票を配布し協力を依頼しており、外国につながる生徒の進学に関する全県的な調査結果は全国的にも例が少なく、貴重かつ興味深いデータとなりました。

本調査結果は外国につながる生徒の高校進学率を全体的に示すだけでなく、例えばポルトガル語やスペイン語を母語とする生徒の進学率が、他の言語を母語とする生徒よりも低い傾向を指摘するなど、生徒の属性によって多角的に分析しています。また、栃木県立高等学校入試選抜細則に記載されている「特別措置」利用状況についても調べ、制度の有効なあり方についても示唆しています。外国人の子どもの進路（キャリア）は地域社会の将来にも関わる重要な課題となっており、かれらを直接支援する学級担任や日本語教室担当教員にかかわらず、学校関係者にとって必読の内容と言えるでしょう。

第3部は、「はじめての日本語指導テキスト」と題し、初心者でも使いやすい日本語指導教材を紹介しました。支援する立場になりいざ日本語を指導しようと思っても「どんなテキストを使えばいいかわからない」「どれも難しくて自分には無理な気がする」という経験をお持ちの方



も多いのではないのでしょうか。HANDS プロジェクトでは県内の日本語教室担当教員を対象にアンケート調査をおこない、どのような教材が多く利用されているか、また選んだ理由や教材の持つ特徴などについて把握しました。その後「外国人児童生徒支援会議」の場において、実際に使用している教員による教材紹介を行うことにより、それらの情報を広く共有する機会を設けました。

本書では、以上の過程を経て広く皆さんに紹介すべきであると判断した教材を選出・紹介しています。日本語指導に関するテキストも、学校の指導形態や子どもの実態に合わせ、読み書きを中心にしたものから表現活動を中心としたもの、そして会話を中心としたものなど多岐にわたっています。その他、漢字指導や作文指導に関するテキスト、担当教員による自作教材も紹介しています。また、特別支援教育分野の教

材を活用することも提案し、指導者のアイデア如何では既存の教材も有効に利用できることを示唆しています。外国につながる子どもの教育に必要なのは特殊技能や専門性ではありません。指導者は使いやすいテキストを通して「いかにして子どもとの距離を取り払うか」が重要と考えています。本書で紹介した教材のどれもが、読者の皆さんにとって外国につながる子どもの教育の良き「入り口」になり得ると確信しています。

『教員必携 外国につながる子どもの教育 3』は、6 月中に栃木県内の小中高等学校および各教育委員会や図書館などに配布予定です。また、個人的に活用を希望される場合には無料で（送料のみのご負担）提供していますので、HANDS プロジェクトホームページ「だいじょうぶ net」の「お問い合わせ」からご連絡ください。

## 再会 ～ 2013 春ペルー調査報告～



宇都宮大学国際学部講師 スエヨシ アナ

2008 年、2009 年に実施したペルー調査では、帰国後のペルー人労働者の子どもたちの教育・生活状況を追跡した。そして、心理学的なアプローチをすることによって子どもたちが教育・家庭環境にどのように適応していくのかを明らかにするように努めた。その継続調査として、2011 年 3 月にペルーに帰国した生徒の進学・就職の実態把握を目的とする聞き取り調査を実施した。翌年 8 月の夏休みにはフォローアップ調査を行った。

毎回の調査で対象者にインタビューをする度に同じ疑問が浮かんでいる。それは、「かれらが受けてきた教育はかれらの進路選択にどのような影響を与えているのか」ということである。

2011 年 8 月リマ市の某日系人学校で、卒業を

控えた 3 人の男子生徒に会った。彼らは 2008 年のリーマンショックの影響により親とともに強制的にペルーへ帰国しており、比較的ペルーでの滞在年数が短い 3 人であった。馴染まない環境に嫌悪感を浮かべ、教室の一番後ろの席に座り、お互いに日本語で話し合うことで他の生徒・教師と壁を作っていたという印象であった。スペイン語能力は不十分で、ペルーの教育制度に対する意識は低く、そしてペルー社会へは無関心であり、校内で際立った存在であったようである。

かれらに接近すると一人は戸惑い、会話を敬遠するかなのような仕草を見せたが、次第に壁が崩れていった。そして、一人が話し始めた。2008 年のクリスマスに親の都合でリマへと帰国した。居たかった国から連れ出され、戻りたく